

英語を母語とする日本語学習者における拗音の音声生成の困難点とその要因  
—日本語教育語彙表からの考察—

Difficulties in the Production of Palatalized Consonants among English-Speaking  
Learners of Japanese and Their Factors: An Analysis Based on the Japanese Language  
Education Vocabulary List

井下田貴子, 早稲田大学  
Takako Igeta, Waseda University

## 1. はじめに

日本語学習者にとって習得困難とされている音声項目は多く存在するが、その中でも拗音は上級になっても母語の影響が残るケースが見られる。拗音は「口蓋化子音＋半母音＋母音」で構成されるため、先行子音の生成時はイ段の子音として口蓋化の保持が必要である。ここに後続母音加わると、1モーラの時間内に複雑な調音運動が求められることから、拗音の生成の難しさの原因の1つは、調音運動そのものの複雑さであると考えられる。

先行研究では日本語教師を対象としたアンケート調査において、学習者の多くが「拗音⇔直音」のように双方向に誤ることでリズムの崩れが生じると指摘されている(近藤 2012)。さらに、語彙の持つ特徴や、英語母語話者における母語の音韻の制約が習得に影響していると考えられる。英語では拗音と同じ/CjV/構造は、後続母音が/u:/の場合にのみ生起するが、拗音は後続母音が/a, u, o/の場合に生起するため、日英で音素配列の制約が異なる。これにより、英語母語話者は母音の種類で発音の受け入れやすさに差が出るとされる(土川 2023)。また、英語の/Cju:/では/j/が脱落して/Cu:/となる傾向があり(Chambers 2002; Glain 2012)、半母音が脱落するという特徴が見られる。さらに、英語では/jju:/という音素配列は生起できず、r音の口蓋化音を音素として持つ言語は有標であるとされる(Hall 2000)。このような母語の音韻的な制約も、英語母語話者による日本語の拗音の生成に関係している可能性がある。しかし、拗音の発音の困難点については音声だけではなく、語彙の種類や導入時期も関係していると考えられる。例えば、拗音は漢語の流入に伴って日本語の音韻体系が変化したため、拗音を含む語彙には、語種に偏りがある可能性がある。

そこで、本研究では、日本語教育語彙表(砂川・李 2012)に収録されている語彙を分析し、英語を母語とする日本語学習者における拗音の発音の困難点について考察を行った。その結果、拗音は発音の習得が難しいとされる特殊拍との共存が多いことや、和語や外来語よりも漢語に多く含まれることが明らかとなり、音声的な要因だけではなく、語彙の難易度も影響している可能性が示唆された。本発表では日本語レベル別にデータを示すことで現場への還元を目指す。

## 2. 分析

砂川・李(2012)の日本語教育語彙表に収録された語彙を分析対象とした。まず、収録語彙の中から拗音を含む語彙を抽出した。次に、抽出した語彙について、①学習レベル、②語種、③語彙に含まれる特殊拍の種類、という3つの観点から

分類し、それぞれ集計を行った。これにより、拗音を含む語彙が各学習レベルにどの程度含まれているのか、また、どのような語種や特殊拍を含む語彙に多く見られるのかを分析した。なお、同一語彙内に複数の特殊拍が含まれる場合は、それぞれの特殊拍に計上した。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 学習レベル別

図1にレベル別語彙数と拗音を含む語彙の割合を示した。拗音を含む語彙数は、全体の約2割を占めている。また、レベル別に見ると、中級前半から拗音を含む語彙が増え始め、中級後半ではその数が大きく増加していることがわかる。このことから、学習者が拗音を含む語彙に触れる機会は、初級から中級へと学習が進むにつれて増加すると考えられる。漢語は中級以上で学ぶ「かたい」文体において多く用いられると考えられ、中級学習者にとっては避けられない高難易度の学習項目であるだろう。中級で学ぶ漢語の語彙が増えることにより、拗音を含む語彙に触れる機会も著しく増加する。そのため、拗音の学習は、単に「きゅ」や「ちょ」といった単音レベルにおける音と文字の一致を理解するだけでは十分ではないと考えられる。実際の語彙の中で拗音をどのように発音するかという点にも目を向け、中級以降も語彙学習と関連づけながら継続的に扱う必要があるだろう。

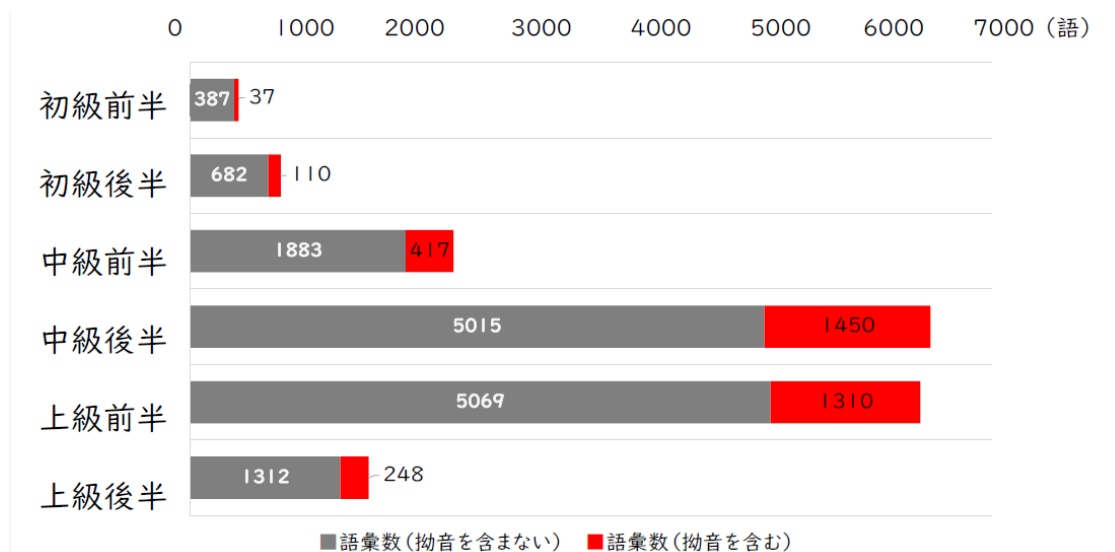


図1 レベル別語彙数と拗音を含む語彙の割合

#### 3.2 語種別

図2はレベル別・語種別の拗音語彙数を示したものである。レベル間で比較すると、いずれのレベルにおいても、拗音を含む語彙は漢語、外来語、和語の順に多いことがわかる。特に、学習語彙が最も多い中級では、漢語が1593語であり、それに次いで外来語が1376語であった。このように、学習レベルにかかわらず

漢語が最も多いという結果は、拗音が漢語の流入に伴う日本語の音韻体系の変化によって生じたという定説とも整合する。

漢語は、非漢字圏の学習者にとっては、語彙を学習する以前に、まず漢字を覚えなければならないという第一段階のハードルがあり、その後に語彙の発音や意味を学ぶことになると考えられる。さらに音声面に目を向けると、拗音そのものの調音運動の複雑さに加え、特殊拍という要素が現れる語彙もある。つまり、漢語に拗音が多く含まれるという語種上の特徴は、非漢字圏の学習者にとって、文字・語彙の学習だけではなく、発音の学習にも関係する可能性がある。このことから、拗音の習得を考える上では、音声的な要因だけではなく、拗音がどのような語種の語彙に多く含まれているのかという点についても考慮する必要があるだろう。

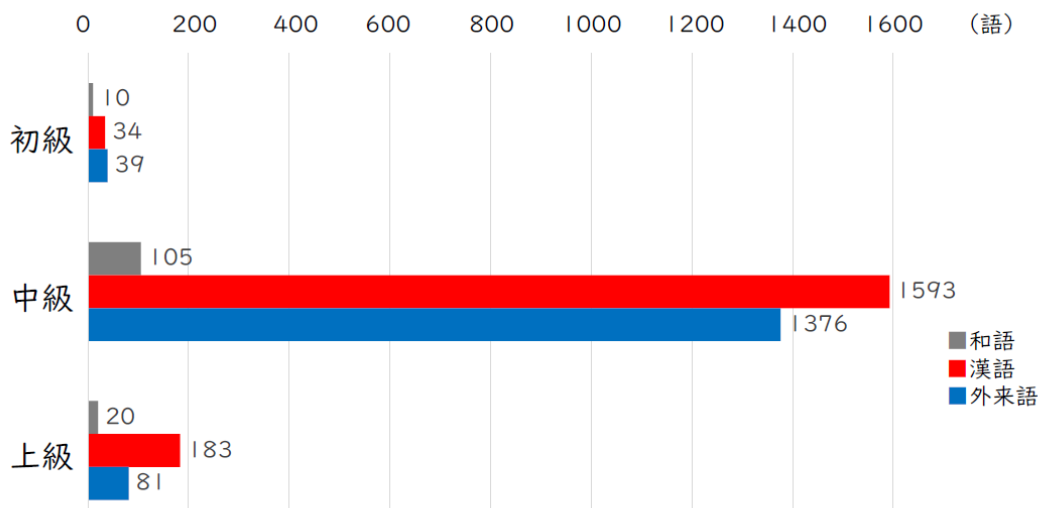


図2 レベル別・語種別の拗音語彙数

### 3.3 拗音語彙に含まれる特殊拍

図3に特殊拍を含む拗音語彙のレベル別語彙数を示す。ここでは、1つの語彙にどのような種類の特殊拍が含まれているかを算出した。1つの語彙の中に2種類以上の特殊拍が含まれていた場合は、それぞれを独立したものとして計上した。一方、同一の特殊拍が1つの語彙中に複数含まれていた場合は、その出現数を複数として計算するのではなく、その語彙には当該の特殊拍が1種類含まれているものとして計算した。したがって、ここで示す数値は特殊拍そのものの出現回数ではなく、それぞれの特殊拍を含む語彙数を示している。

結果として、拗音を含む語彙に含まれる特殊拍は長音が最も多く、次いで撥音が多かった。また、図3からは中級および上級において、長音や撥音を含む拗音語彙が多く見られることがわかる。このように、拗音を含む語彙には特殊拍が共存するケースが多く見られることから、単に拗音そのものの調音運動の難しさのみが習得に影響を与えているのではなく、拗音と特殊拍を含む語彙全体の音韻構造の複雑さが、発音の難しさを高める一因となっている可能性がある。したがっ

て、拗音の習得を考える際には拗音を単独の音声項目として捉えるだけではなく、実際の語彙の中でどのような音韻構造を形成しているのかという観点からも捉える必要があると考えられる。

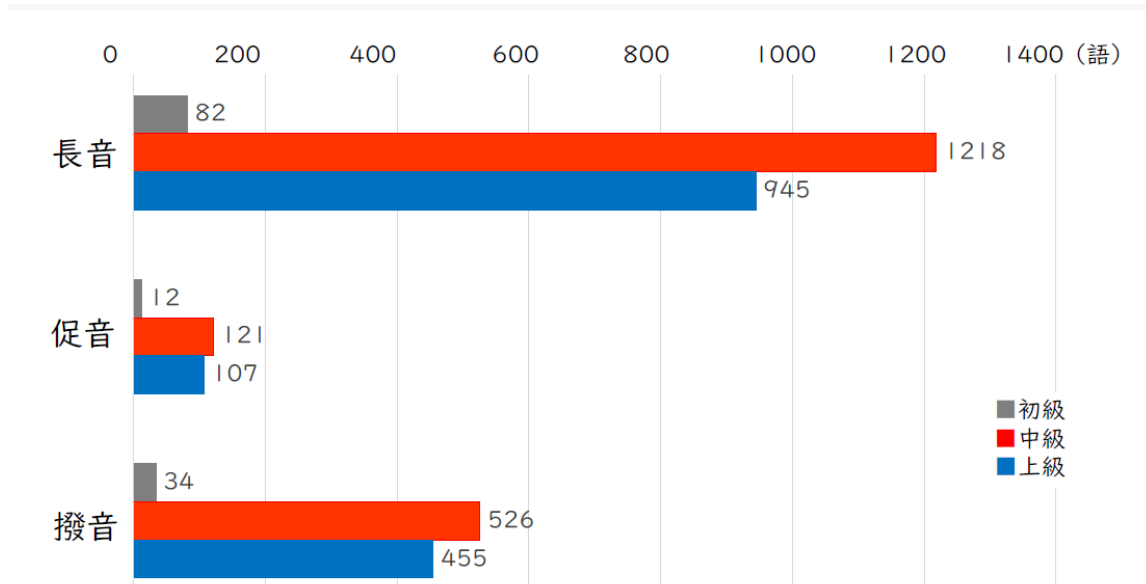


図 3 特殊拍を含む拗音語彙のレベル別語彙数

#### 4. 結論

英語母語話者にとって拗音の習得が困難である背景には、調音上の難しさだけではなく、①学習段階による語彙量の変化、②語種の特徴と偏り、③特殊拍を含む音韻構造、といった語彙的・音韻的特徴も関係している可能性が示された。これらの結果から、教育的には拗音の発音指導を初級の段階だけで完結させるのではなく、中級以降も語彙学習と関連づけながら継続する必要があると考えられる。拗音を多く含む漢語や長音など、他の特殊拍も含む語彙を扱う際には、語彙の意味や表記の学習だけでなく、発音にも意識を向けさせる指導が重要になると考えられる。

#### 4. 今後の課題

本研究では、「日本語教育語彙表」に収録された語彙を対象として分析を行ったため、英語母語話者による実際の発音データについては検討していない。したがって、本研究で示された語彙的・音韻的特徴が、実際の拗音の発音にどのように影響しているのかについては、今後さらに検証する必要がある。今後は、英語母語話者による実際の発音データを収集し、学習レベル、語種、特殊拍との組み合わせという観点から比較・分析を行うことで、拗音の発音の困難点について、より詳細に検討していくことを課題としたい。

#### 参考文献

- 近藤真理子 (2012) 「日本語学習者の音声習得における第一言語特有の干渉と普遍言語的干渉ー日本語教師へのアンケート調査からー」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』, 3, 21-34.
- 砂川有里子・李在鎬 (2012) 「日本語教育語彙表」 <https://jhlee.sakura.ne.jp/JEV/> (2026 年 4 月 20 日閲覧)
- 土川京子 (2023) 「英語話者による日本語拗音の借用パターン」 第 166 回 日本言語学会大会予稿集, 60-66
- Chambers, J. K. (2002). Yod-dropping in an English accent. *Journal of the Phonetic Society of Japan*, 6(3), 4–11.
- Glain, O. (2012). The yod /j/: Palatalise it or drop it! How traditional yod forms are disappearing from contemporary English. *Cercles*, 22, 4–24.
- Hall, T. A. (2000). Typological generalizations concerning secondary palatalization. *Lingua*, 110(1), 1–25.